2−3　震災発生時の出張先での体験

都市・環境・ｴﾈﾙｷﾞｰ事業部事業部長
森川　敏彦

１．はじめに

あの日（2011 年 3 月 11 日）、私は、東北出張中に支社（仙台市若林区）で東日本大震災を体験しました。ここでは、被災当日から、3 月 14 日の夜帰京までの体験を記述します。

２．恐ろしい「揺さぶり」を体験

3 月 11 日の 14 時 46 分、東北支社での会議を終え、次の出張先へ向かう準備を始めた時、ぐらっーと大きく揺れ、危ないと思いその場から離れ、柱を背にロッカーを押さえる構えをしました。

その直後に更に強く大きな揺れが！柱を背にロッカーを必死に押さえ耐えました。周囲の机やロッカー等は、波打ち際の石ころの様に大きく右や左に、巨大な何かが悪戯に建物を揺さぶる感じで、とても恐ろしく、かつ異常に長い。

一端、揺れが弱まった時、会議室を振り返ると、テーブルの下には、周囲から落下した段ボール詰めの書類等が何故か綺麗に収まっていた。

震災直後の支社オフィス 2F（携帯で撮影）

３．当日の寝床の確保と食料調達について

漸く揺れが弱まり、社員の無事を確認後（16 時頃）帰宅のため解散、気温が下がり、雪が降り始めていた。電気が消え、余震が続く中、幹線道路は帰宅者の列、当たり前のように静かに黙々と歩く姿が今も忘れられない。私も支社の帰宅車両に便乗し、ホテルへ向かう。車から見る仙台駅前は、ビルの外壁の落下により、バス停留所の屋根が潰されている光景が見られたが、他の大きな被害は、感じられなかった。しかし、車のＴＶに「石巻港に向かうダンプが津波に追われる」映像が放映され、大津波の発生を知り、驚愕。さらにお台場周辺からの映像で地震による火災発生等が映され、家族は無事か？何処でどの程度の被害？状況が全く判らない。

ロビーは、宿泊客や帰宅困難者で満杯状態、宿泊は、建物の被害調査結果を受けて判断とのこと、待つしかない。晩飯調達にコンビニへ、何処も長蛇の列、店外にワゴンを置き懐中電灯での販売、ｶﾛﾘｰﾒｲﾄと水 2 本を確保し、ロビーで蝋燭の灯りの中、頻繁に起きる余震に耐える。深夜 2 時頃、漸く宿泊の許可、懐中電灯で非常階段から案内される。壊れて閉まらない非常口を通りベットで仮眠、寒さと頻繁に余震が続く中、ただ寝るしかない。

４．二日目～

朝、食料調達のため街へ、店は、予想どおり閉まっている。ｱｰｹｰﾄﾞ街まで足を延ばすと、蒲鉾専門店前に人の列、入口上部には、ｱｰｹｰﾄﾞの鉄骨梁が外れ今にも落下しそう！警戒しながら、蒲鉾を確保。ホテルで食事後、モバイルで東京への長距離バスの予約を取り乗場へ、しかし、そこには、運行休止の貼紙。交通の復旧まで、支社で待機。

夜は、病院の非常灯で明るい窓側の椅子で寝ることに、寒さと頻繁に起きる余震で眠れず。

５．三日目～

昼過ぎ電気が復旧、電気が灯り、電話やＰＣも使用可能になり、漸く情報が得られる。ネットに【3/14 日から東京へのルート「仙台⇒山形⇒鶴岡⇒新潟⇒東京」が本格運行】が掲載された。（山形県と宮城県交通局の連携対応に感謝）

夜 22 時過ぎ、遙々岡山本店・東京本社から陸路で救援物資が届く、漸く布団で寝れる、食事が出来る、有難う本当に感謝。

６．四日目～帰京

前日確認したルートで 9 時頃、乗り場へ向かい長蛇の列に並び 2～3 台目のバスに乗車、11 時頃出発し、無事夜遅く帰宅の途についた。僅か 4 日間の体験ですが非常に辛いものでした。

東日本大震災で被災された皆様は、未だ仮設住宅での生活が続いています。その心労は計り知れません、一日も早く通常の生活に戻られることを切に願っています。